



洋風のシンボル

2000年以上の歴史を持つ西洋建築史では様式建築が洗練を極めた。
明治以降の日本はその輸入に邁進したが、50年を過ぎた頃には
習得の難しさを痛感し、新しい様式の探求に乗り換えたという。
後に近代建築の巨匠となった建築家たちの、偽らざる気持ちである。

photo: Hitoshi Kumamoto

column

帝冠様式



【時代の気分とイデオロギーが生んだデザイン】

本章でたびたび登場する帝冠様式とは、その実、明確なデザインボキャブラリーを持つ様式というわけではありません。戦後、洋風のビルに和風の屋根をのせた建物を帝冠様式と称して批判したことから、広く認識されました。

言葉としての発祥は、大正7年に実施された国会議事堂のコンペ案に異議を申し立てた秋田出身の建築家下田菊太郎が、ギリシア建築の神殿のような建物に紫宸殿をのせたような案を発表し「帝冠併合式」と称したことに始まります。

下田の案は、和洋折衷のデザインを模索していた建築史家の伊東忠太からは無視されましたが、その後昭和初期になって陸軍の台頭とナショナリズムの高まりを受け、にわかに脚光を浴びます。その背景には、各地の行政機関に顧問として招かれた佐野利器の暗躍があったとも噂されます。

「建築大辞典」によれば、帝冠様式は昭和5年から15年ごろのもののみを指すとありますが、代表作の神奈川県庁は昭和塾堂と同じく昭和3年に建設され、明確な指標とはいえません。

ただ、そういった政治色や当時の社会的な気分が、帝冠様式を生み出す背景にあったことは、忘れてはならない時代の姿といえるのです。



photo: Taro Igarashi



壁面は洋風、屋根は和風の外観。一番目につく唐破風には龍や鳳凰を配して和風を強調している

こ ゆみ 小弓の庄(旧加茂郡銀行羽黒支店)

洋風建築への憧れ、かつての文明開化のシンボル



唐破風のディテール。入り口扉が重厚

不思議なたたずまい

名鉄小牧線の羽黒駅のすぐそばに、洋風にも和風にも見える不思議な建物があります。

愛称を「小弓の庄」といい、以前は旧稲置街道沿いにたっていた加茂郡銀行羽黒支店だった建物です。小弓の庄という名前は移築に際して公募されたもので、かつてこのあたりが藤原氏の荘園で、小弓庄と呼ばれていたことにちなみます。

変転の歴史

加茂郡銀行羽黒支店がたてられた頃の明治後期の羽黒村は、農業と養蚕が盛んで、名古屋と犬山をつなぐ旧稲置街道沿いには、町家が立ち並び、建物はそんな町並みから少しセトバックされて軒を連ねていました。

明治後期の擬洋風建築

また銀行業としては、大正から昭和にかけて吸収合併を重ね、昭和5年に廃店。建物は近隣の住民の手に渡り、住宅に転用されました。その頃、道路の拡幅に合わせて敷地の奥に曳家され、戦中は愛北病院羽黒診療所として使用されたといえます。

平成になって取り壊しの話が持ち上がり、と、地元住民から保存の声が上がリ、犬山市がひき取って、解体後に現在地へ移築され復原に至りました。

その一方で、入口に突き出した唐破風の鬼瓦には龍がのり、その下の欄間には鳳凰が彫刻されていて、和風のディテールが目をはきまます。

このような和風と洋風が混じり合った建物は、明治初頭に建てられた擬洋風建築に似ています。ただそれら擬洋風建築は大工が西洋建築を模して作ったため、奇妙なデザインが多いのですが、小弓の庄はそれぞれの装飾がところをわきまえ、違和感なくまとまっています。

また内部の吹き抜けには、開閉のための回廊が巡っています。この形式は当時の銀行でよく用いられた構成です。2階の正面には大きな欄間の装飾がリズムカルに配置され、奥の座敷の存在が暗示されています。

以前はホールにカウンターがありましたが、復原の際に改築され、地元の情報交換の場として本棚やラックなどが置かれています。

残されたシンボル

小弓の庄は、まちの人たちの活動の場とするため、犬山市がまちづくり拠点施設第一号として建物を保存・復原しました。

かつて江戸風情のある街道沿いを賑やかせた銀行が地域に馴染み、文化施設として生まれ変わって愛される。そんな望ましい建築文化が、この場所でひっそりと継続されています。



吹き抜けから2階座敷の欄間を見る



2階座敷。立派な床の間を構えている

明治40年頃
木造二階建て
犬山市大字羽黒字古市場53-1
www.city.nuyama.aichi.jp/shitsu/koyuminojousu/1001492/1001670



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

愛嬌のある外観。棟先が切り落とされたことで洋風の腰折屋根に見える。左隣に現在の郵便局が隣接する

野間郵便局旧局舎

まちの思い出を抱えた、愛嬌のある洋館の郵便局

野間の歴史

野間郵便局旧局舎の脇を通る細い路地を進むと、すぐ近くに野間海岸が迫り、その手前には南北へまっすぐ通る魅力的な道があります。かつてはこの道がまちのメインストリートで、道沿いには海水浴場や映画館、村役場があり、野間郵便局もそこに面して開局していました。

昭和6年に国道247号が通ると、それに



事務室内の観。窓から明るい光が指す

和洋折衷の郵便局

この建物は、裏手側が和風の建物となっている点も特色です。構造的にも両者は分かれています。洋館はトラス構造、裏側は和小屋になっています。

また海が近いため基礎が高く、玄関では扉の棧が下構成されていて、郵便局らしい遊び心のあるディテールとなっています。

扉を開けると広々とした事務室があり、手前にはカウンターが当時のまま残されています。入口のそばには公衆電話の個室と局長室があり、木製の建具が上げ下げ窓からの光を受けて美しいです。

現在、事務室は市民の文化活動の拠点として活用され、寄席やコンサートなどにも使用されています。

受け継がれる遺産

野間郵便局旧局舎の特徴は、建物がほぼ当時の姿を保っていることにあります。それは、現在でも森田家の人々が管理し、施工した大工の弟子が面倒を見続けていることと深く結びついています。

また局舎には膨大な資料や郵便局の道具類が保管されています。今ではすっかり様子を变えた野間にとって、これらの資料は建物とあわせて、まちの歴史を伝えるかけがえのない財産です。



展示された資料。今では貴重なまちの記録

町並みに溶け込む洋館

知多半島を周回する国道247号を南下すると、名刹野間大坊の程近くの商店街に溶け込んだ、味わい深い洋館があります。

外壁は水色の下見板張り、半切妻屋根にはスレートが斜めに葺かれ、先の尖った棟飾りと小さな屋根窓がふたつ付いています。ファサードが非対称なものも愛嬌。手前には昔ながらの赤いポストがちょこんと鎮座し、彩りを添えています。

この建物の外観は、三代目局長の森田定吉が設計したと伝わっています。不慣れな手つきで洋館をデザインした姿が、ありふれた建材で建てられた洋館に独特の味わいを与えています。



脇の路地。すぐ先に野間海岸が迫る

昭和6年頃
木造2階建て
〔外観設計〕森田定吉〔大工〕杉村定次郎
知多郡美浜町大字野間字須賀91-1

重要文化財 名古屋市市政資料館(旧名古屋控訴院)

名古屋の近代建築保存のターニングポイントになった傑作



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

ドームを頂く中央部と両脇の角屋、それをつなぐ翼廊が見事に調和した外観



木造のドーム。西洋建築では宇宙や真理をあらわす

まちのシンボル

名古屋には、まちのシンボルともいえる素晴らしい様式建築があります。それが名古屋市政資料館です。この建物は、もとは控訴院（現在の高等裁判所）の庁舎でした。

明治以降の日本は、まちを形成する建物を西洋建築に倣^{なま}って建てました。また、その中でも洗練された様式建築の習得は、明治時代を通じて日本の建築界の最重要の課題でした。

名古屋控訴院などの裁判所を設計した司法省（現在の法務省）では、大日本帝国憲法の策定にあたりドイツ圏の憲法を参照したた

め、ドイツのネオ・バロック様式に基づいてデザインされました。

様式建築の到達点

様式建築でとりわけ重要になるのが外観です。中でも、ギリシア建築に端を発する、柱と梁とペディメント（破風）からなるデザインモチーフは、ローマ建築からルネサンス建築へと受け継がれ、世界中に広がりました。この系列は古典主義様式ともいいます。またその対になるのが、中世のフランスやドイツで登場

したゴシック様式です。

名古屋市政資料館の外観は、白い柱と赤いレンガ風タイルで構成されています。白い柱が古典主義様式、赤いレンガ風タイルがゴシック様式に由来するもので、ドイツの傾向が現れています。

また、中央の車寄せの円柱と、壁面に並ぶ角柱、角屋の厚い角柱とは立体感が異なり、この差が外観に陰影による変化を生み出しています。

車寄せの上にあるドームは宇宙や真理をあらわし、ここを頂点として全体の造形がまとめ上げられています。このような造形力が、古典主義様式の最大の見どころです。

保存への物語

そんな造形美を誇る名古屋市政資料館ですが、昭和40年代から50年代にかけて取り壊しの危機に瀕したことがありました。

これを救ったのが名古屋市の若い職員たちでした。彼らは建物の価値を詳らかにした研究レポートを作成して、建築史家飯田喜四郎の協力を仰ぎ、保存の道を探りました。また、その活動はメディアを通じて一般の人々の支持を集めました。



メインフロアの大階段と吹き抜け

そして、粘り強い交渉と知恵を絞った調整が実り、建物の保存が決まりました。また、その後の活用については、重要文化財の指定箇所を限定することで、市民に開かれた建物へと生まれ変わりました。

名古屋市政資料館の保存に関わった職員たちは、ここを足掛かりにして多くの文化財建造物や町並みの保存と活用に携わり、成果を上げていきました。後に続くそれら保存の物語もあわせて見ると、この建物がひととき重要な意味を持つて感じられます。



古典主義様式のファサード。白い花崗岩の複雑な加工には職人がとても苦労したという逸話が残る

岡崎信用金庫資料館(旧岡崎銀行本店)

名建築家鈴木禎次が手がけた、古典主義様式の華やかな銀行

岡崎銀行本店略歴

岡崎信用金庫資料館は、元は岡崎地方で最大の金融機関だった岡崎銀行の本店として建てられました。

明治以降、岡崎は生糸や綿花、養蚕^{まよう蚕}、紡績など繊維産業が発展し、それに合わせて金融機関が求められました。明治23年、岡崎の初代町長深田三太夫をはじめ、14人の財界人が発起人となって設立されたのが岡崎銀行でした。

その本社ビルの設計に選ばれた鈴木禎次は、三井銀行の建築係を経て、名古屋でも多くの銀行建築を手がけたスペシャリストでした。

様式からの逸脱

この建物は旧東海道が折れ曲がる角地にたち、南側が正面のファサードとなっています。その正面は三つの部分に分かれ、中心の入り口上部にはドリス式の円柱が太い梁を支え、その上に櫛形^{くしがた}のペディメント^{じやうぎん}がある古典主義様式のデザインとなっています。

また両側に伸びる塔状の屋根はそれぞれ違うかたちになっていて、窓の数や大きさ、その周りにあしらわれた装飾も、左右で全く異なります。

残された外観

この破調ともいえるデザインは、アールデコやセセッションなど海外の新しい様式を取り入れたものと考えられます。その頃の鈴木禎次は、名古屋や大阪でも同じ手法で銀行建築を設計していて、新旧の様式を折衷しながらデザインを模索していた様子が伺えます。

華やかな外観を残す一方、この建物は、昭和20年の空襲で内部空間を全て失っています。かつて館内を彩った大理石のカウンターや木調の美しい内装は、竣工記念の絵葉書にしか残されていません。

また、岡崎信用金庫が資料館として保存・活用するにあたり、鉄筋コンクリートで補強



紙幣や金融の歴史的資料が展示された2階



中央2層部分に配されたドリス式円柱

名古屋の名建築家

いまも江戸時代の入り組んだ町割りを残す岡崎の中心市街地に、名古屋を拠点に活躍した建築家鈴木禎次^{しんじ}の作品が残されています。国道1号から籠田公園^{かた}へ向かう中央緑道の途中に見える、赤いレンガと白い御影石で構成された華やかな外観の建物が、岡崎信用金庫資料館です。

鈴木禎次は、明治の終わりから昭和にかけて変化を遂げる建築界で、様式建築からモダン建築まで幅広く対応できた建築家でした。この建物はその過渡期に位置付けられます。

し、2021年には基礎部に免震レトロフィット工法による免震装置が施されました。

現在、館内では金融関係の常設展に加え、歴史や文化に関する様々な企画展が開催されています。その一角には鈴木禎次のパネルが展示しており、卒業設計の図面や県内で手がけた建築が紹介されています。

ありし日の威容を誇る様式建築が変わらずに街角を彩り、その中で設計者を讃える展示が行われる姿に、静かな感銘を受けます。



建築家鈴木禎次の卒業設計のパス

1917年(大正6年)レンガ造(一部石造)2階建て
〔設計〕鈴木禎次
岡崎市伝馬通1-58
<https://www.okazaki.co.jp/local/museum/>



旧街道沿いの町並みに溶け込む外観。角地を逆手にとった古典主義様式の構成が巧み

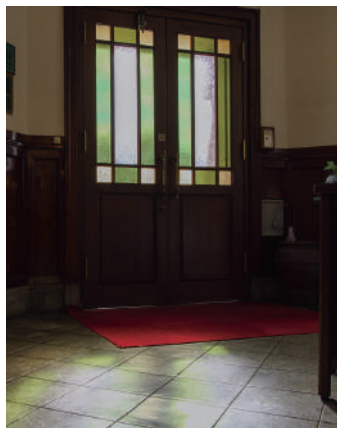
大野宿 鳳来館(旧大野銀行本店)

山間部の旧街道沿いに佇む、美しいレトロ建築

創建から保存まで

鳳来館の前身の大野銀行が創業したのは明治29年のことで、その頃の大野は生糸業と林業で発展しました。また大正12年には私鉄鳳来寺鉄道(現JR飯田線)が開通し、三河大野駅と大野宿の間に大野橋が架けられて別所街道と繋がり、その角地に大野銀行本店が新築されました。

戦後、大野銀行は東海銀行(現三菱UFJ銀行)に吸収合併され、建物は東三信用組合や豊川信用金庫を経て平成17年に閉鎖されました。その際に建物の保存が検討され、地元縁の深い株式会社スエヒロ産業が手を差し伸べ、喫茶店とギャラリーを併用した鳳来館の開館に繋がりました。



ステンドグラスの光が美しいカフェ

鉄筋コンクリート造の古典主義様式

鳳来館を訪れると、旧街道に馴染んだたずまいに思わず見惚れてしまいます。角地にピッタリ収まり、南面した建物が明るい表情を見せているからです。

敷地に合わせてカーブした壁面には1階と2階を繋ぐ柱が並び、深い軒先と合わせて古典主義様式らしい姿となっていますが、よく見ると柱間が不規則で幅もまばらになっています。これはコーナーの入り口や窓の配置のずれを柱の構成で調整した、巧みなデザインです。

少し格式ばった入り口から館内へ入ると、木調の内装が美しいカフェが迎えてくれます。目の前には立派なカウンターがあり、3本のドリス式の円柱が立っています。これは銀行だった頃の名残で、林業で栄えたまちらしい設えです。

また、窓に嵌められた薄い緑色のステンドグラスが館内に幻想的な光を引き込み、カップやグラス、コーヒーサイフォンや美術品などの置物を美しく彩っています。

不思議の国の鳳来館

2階のギャラリーでは、大野宿を紹介したパネルや美術品などが展示され、また企画展

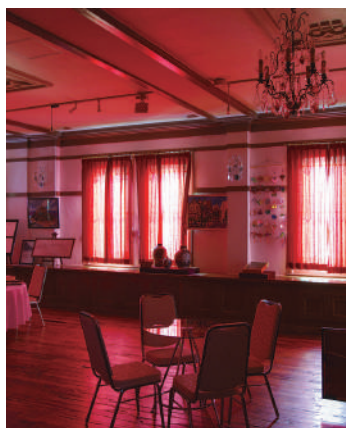


南側の外観。柱間や柱の幅に注目

奥三河のレトロ建築

建物は所有者が変わることで、より魅力的な建築になることがあります。鳳来館は、新しい所有者の手で銀行建築から幻想的なレトロ建築へと生まれ変わった、素敵な建物です。鳳来館のある新城市の大野宿は、秋葉山と鳳来寺山を結ぶ秋葉街道鳳来寺道が通る交通の要所で、明治の初期には東栄町別所から豊橋へ通じる別所街道が整備され、山間部でありながら早くから産業が栄えました。

やイベントにも利用されています。別室には竹久夢二の展示や、木調の上質な設えの旧店長室が残されています。そのいずれもが、窓から差し込む光で輝いて見えます。山間の静かな旧街道にある洋館に入ると、そこでは美味しいコーヒーや食事が提供され、館内には美術品や置物が溢れる。まるで童話の中に迷い込んだような経験をできるのが、鳳来館の魅力です。一度行ったら忘れない、唯一無二のレトロ建築です。



赤いカーテンが幻想的な2階ギャラリー

1927年(大正14年)

鉄筋コンクリート造2階建て(屋根及び2階床は木造)

〔設計〕志水建築事務所(篠田進)

新城市大野上野17-2

<http://hokraikan.suehiro-i.com/guide/index.htm>

登録文化財で昼食を

素敵な建物で美味しい食事をいただくのは、豊かな時間を過ごせる最高の贅沢といえるでしょう。
ここではその中でも、登録文化財の建物と一緒に飲食を楽しめるスポットをご紹介します。



蒲郡クラシックホテルのシーフードカレー。香ばしく焼かれた魚介とカレーのハーモニーが素晴らしい



レストランの内装。オリジナルの設えを残す

蒲郡クラシックホテルのシーフードカレーと 伝統のビーフカツレツ

最初にご紹介するのが、蒲郡クラシックホテルの2階にあるレストランのシーフードカレーです。

三河湾を見下ろす絶好のロケーションにあるフレンチレストランは、建設当初の設えが残され、とりわけ前面に迫り出したベランダ席は、目の前にパノラマが広がる贅沢な席になっています。

ホテル内のレストランということもあり、値段は少し高めですが、ランチではお手頃な価格で本格フレンチを楽しむことができます。おすすめはランチ限定のカレーセットで、ビース、シーフード、野菜、透明カレーから選



伝統のビーフカツレツ

鳳来館の信州長屋門謹製ポーク照焼重

もう一つは、大野宿鳳来館で提供される、信州長屋門謹製ポーク照焼重です。カフェのイメージが強い鳳来館ですが、食事も美味しく、名物のカレーや栗豚丼をはじめ、5種類の

間も無く口の中で肉の味が爆発します。あまりの旨さに我を忘れること請け合いです。



鳳来館の信州長屋門謹製 SPF ポーク照焼重



サイフォンコーヒーのある風景

パンが楽しめるコーヒー付きのランチも人気です。

なかでも、数量限定の信州長屋門謹製ポーク照焼重は、旨味の強いSPF（特定病原菌不在）ポークのバラ肉を焼いて甘辛いタレに絡めたもので、豚の旨味がタレと絡む濃厚な味わいは絶品です。敷き詰められたご飯と一緒にかつこむと、思わず唸り声上がるほどの美味しさです。また傍に添えられた桑の葉うどんは、こってりした口を落ち着かせてくれる名脇役です。

食事を終えた後は、サイフォンで丁寧に淹れられたコーヒーと共に、暖かい光に満たされた店内でゆったりとした時間に身を委ねる。まさに至福のひと時です。

ぶことができ、バリエーションも豊かです。
なかでもシーフードカレーは、オーブンで焼かれたエビや帆立、ポアレされた季節の魚などがふんだんに盛り付けられています。香ばしい魚介を味わいつつカレーを頬張ると、深みとコク、ほのかな甘みにピリッとスパイスの効いた芳醇な味わいが、口一杯に広がります。またカレーのルウには隠し味で帆立の貝柱が入っていて、魚介との間を上手に取り持っています。
もうひとつの名物が伝統のビーフカツレツです。池波正太郎が愛したレシビを聞き取り調査などを重ねて復活させた逸品です。薄めにパン粉をつけて焼き上げた分厚いフィレ肉を特製のソースと一緒にいただく、咀嚼する



photo: Akihiko Mizuno

朝日に輝くファサード。周囲の建物より一回り大きな外観が古い町並みの中でひととき目を引く

津島市観光交流センター（旧津島信用金庫本店）

観光交流センターに転用された、旧街道沿いの銀行建築



古い町並みを残す津島上街道

実寸大の巻藁がある風景

宵闇の水面に浮かぶ巻藁船が幻想的な尾張津島天王祭。600年の歴史をもつ祭礼は、ユネスコ無形文化遺産に登録され、全国でも指折りの華やかな夏祭りとして知られています。

その巻藁の実寸大の模型を間近に見られるのが、天王祭をはじめ歴史ある津島の情報を発信している、津島市観光交流センターです。この建物は、曲がりくねった津島上街道に軒を連ね、かつては銀行建築として古い町並みの中でも目立った存在でした。

市民団体の保存活動

この建物は、津島の繊維産業の発展を担った名古屋銀行（東海銀行の前身）の津島支店として、昭和4年に建てられました。設計は、

されているのも見どころです。

朝日に輝くまちのシンボル

この建物を見に行くなら朝がおすすです。澄んだ空気の中、古い町並みを歩いていると、朝日を浴びてキラキラ輝く姿がとても美しいからです。

津島市観光交流センターには、午前中から地元の人や観光客が気軽に訪れ、思い思いの時間を過ごしています。魅力ある活用がなされている、素敵な建築です。



銀行時代の名残の立派な金庫



行燈のように館内を照らす巻藁

名古屋銀行に在籍していた坂野鋭男で、学生時代に鈴木禎次に教えを受けた一人でした。戦後になると、東海銀行津島支店を経て、津島信用金庫として使用されましたが、平成15年にいちい信用金庫との合併の際に取り壊しの話が持ち上がります。

その時に声を上げたのが地元の人々で、彼らの強い思いを受けた津島市が寄贈を願い出て、保存が決まりました。また建物にまつわる都市再生整備計画では、市民グループの天

王文化塾や地域住民などが参加して検討を重ね、平成21年に観光交流センターとして生まれ変わりました。

鉄筋コンクリートの銀行

建物のたつ場所は旧街道に直行する天王通りから少し入ったところにあり、大通りからもその姿が確認できます。

またファサードは、全体がフレーム状の枠で構成されていて、それが下部の花崗岩まで徹底されています。そこに軒下の装飾や入り口のペアカラム（双柱）など様式建築的な装飾が付いています。

少し引き込んだ入り口から入ると、内部には大きな吹き抜け空間が広がっています。中央には2本の円柱が立ち上がり、壁面の角柱と比べて、社寺建築のような空間の差異化が感じられます。

賑やかな館内できれいな目を引くのが、天井まで届きそうな巻藁の実寸大模型です。天王祭では限られた人しか見られない巻藁の内側の光景が体験できる、面白いインテリアとなっています。

また正面奥には銀行だった当時の金庫が残り、吹き抜け上方を巡るギャラリが復元

1929年（昭和4年）

鉄筋コンクリート造2階建て

津島市本町1丁目52-1

【設計】坂野鋭男

<http://nc-ppp.com/tsushimashikankou/>